
さくらアナザー ～罪隠す弱者と寄り添う桜花～

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらアナザー　　く罪隠す弱者と寄り添う桜花く

【Nコード】

N7488U

【作者名】

風花

【あらすじ】

これはもしもの物語　　いや、本当はこの物語こそ彼の正しい人生だったのかもしれない。

祖父が運命を覆す装置など作り上げなければ　　作り上げたのがもう少し遅かったのなら、きっとこうなっていたはず。

魔法少女リリカルなのは　ETERNAL及び『リリカルなのはStrikerS』　The last of crimeく

という物語に至ることのなかったありえたかも知れない世界。

もうひとつの世界。 始まります

（前書き）

今日は、風花です

『蒼空の軌跡』の執筆時間を削り、書き上げていたのがこのお話です
以前から、この話は書こうと思っていました

もし、レインがなのはの世界に飛ばされずにさくらと付き合っていたらという物語です

今の文の通り、リリカルキャラは一切出てきません。どんなに鎌を突き付けられようが、どんなに砲撃に飲み込まれようと出ないものは出ないんです。……ちよっと身体に染みますが（苦笑）

それと、この話は次の長編に出てくるキャラも出てきますが気になさらないように

それでは、さくらアナザー、始まりますっ

飛波 レン レイン・アスハと東條 さくらが付き合いだして
一ヶ月が過ぎた

これと言ったきっかけがあつたわけではない。特選クラスになってからレインは学園に遅刻して、授業さぼって、街をぶらついて、身体を鍛える

そんな毎日の中、中学からクラスが同じだけだつたさくらと知り合い、友達になり、親しくなり、いつの間にか恋人同士になっていた彼女の事は付き合うほど好きだつた訳じゃない。最初は、きつとすぐ終わると思つて頷いた。だけどさくらはそんなレインに満ち溢れんばかりの楽しさ、喜び、愛しさを教えてくれたのだ
そのおかげでレインは毎日を楽しく過ごしている

心の内に深い 深い深い闇を残したまま

「……………よし」

時刻は午前六時四十五分

そんな明け方の時間に一軒家の前でよし、と呟いていた少女がいた
栗色の髪をピンク色のリボンでポニーテールと呼ばれる髪形にしている身長百四十cmの少女

彼女の名前は東條 さくら

眼の前の家に住んでいるレインの恋人である

そんな彼女がこんな時間に何のようかと言つと、

（今日こそレン君の寝顔を見るのよ。ファイト私！）

恋人の寝顔が見たかったからだつた

開け放たれた玄関の奥には、家主でありレインの養祖父の平賀 要衛……通称奈波の源内が柱に凭もたれながら静かに寝息を立てている。手にスパナを握っているという事は、恐らくまた作業しながら寝入ってしまったのだろう

「おじいちゃん……あれほど毛布掛けて横になって寝てつて何度も言つてるのに……もう」

口では怒っているさくらだが、その表情は薄い微笑みが浮かんでいた。近くに畳まれていた毛布を源内に優しく掛けたさくらは、起こさないようにそつと二階に上つていく。二階にはさくらから見て右に一部屋、左に二部屋あり、その中の一つの襖に手を掛け、ゆっくりと開いた

中はレインが眠っているベッドがあるだけの酷く殺風景な部屋で、ツンとさくらの胸を悲しみが過ぎ去っていく

この部屋を見るたびさくらは少し、悲しくなるのだ

さっきのような浮わついた気持ちはこの部屋の襖を開けた瞬間に失せていた

静かに眠っているレインに近付く。彼の顔は起きている時には見せない穏やかな表情が刻まれている

幸せな夢を見ているのかな……？

そう考えたさくらは悪いと思いながら、カーテンを開け、レインの身体を揺する

「ほら、レン君。朝だよ、起きて」

ゆさゆさ、ゆさゆさ
ぐらぐら、ぐらぐら

幸せな夢からレインを引つ張りだす
夢はいつかは覚めないといけない

覚めることを忘れた夢は、それがどんなに幸せな夢であつたとしても
いつかは悲しみに変わってしまうから

だからさくらはレインを起こす

悲しみに彩られる前に、幸せを幸せで終わらせる為に

「……………うつん……………」

軽い呻き声を上げながらレインはその瞼をつつすらと開ける。さくらは半開きの瞳にも映るように揺すりながら覗き込む

「おはようレン君。朝だよ」

「……………。…………寝たりないからもう少し寝る……………」

布団を頭まで被りながら寝返りを打つレイン

もしかしたら、源内の仕事でも手伝っていたのだろうか

「そんな事言っていないで起きてよ」

「……………っていうか、毎日毎日起こしに来なくていい……………」

「そうはいかないよ。いつつもレン君は早起きで寝顔が見られないし、それに…………彼女さんだから」

「別れよう」

あっさりと別れようと言われた

さくらは思わずレインを揺するのを止めてしまう

それで眼までだけ布団から出すレイン

眼の前には、少し沈んだ顔をしたさくらが自分を見ていた

「……冗談でもそんな事言わないでほしいな……凄く悲しくなるよ……」

さすがに悪いと思ったのか、レインはバツの悪い表情で上体を起こして寝癖の付いた髪を掻く

「……すまない」

「……いいよ。でも、罰としておじいちゃんを起こしてねレン君。私は朝ごはんを作るから」

「分かった」

頷くのを確認したら、さくらは部屋を出て朝食の支度を始めるため一階に戻るのだった

朝食を食べ終えたレイン、さくら、源内の三人は食器を片付けるとそれぞれ仕事に入った

レインとさくらは学園へ
源内は新たな発明をするために作業を

さくらと付き合い始めてから、レインは遅刻が減った
もちろん毎朝さくらが起こしに来るおかげだ
と、その時、後ろから声をかけられた

「いよっす！ 元気があレン！」

「つと……森羅か。眠いが元気だ」

背後からレインの首を腕でロックしたのは、茶髪に茶の眼、眼鏡を
かけた少年

少年の名前は久遠寺 森羅

さくらの友人でレインの二人しかいない親友の一人
金持ちだが、それを鼻にかけることなく自然体で人と接する為、友
好関係はかなり広い

「ほっら、森羅も落ち着きなさい」

さらに後ろから声をかけたのは、久遠寺 咲夜。森羅の双子である
どちらが兄なのか姉なのかは決まっていらないらしい。その事でよくも
めている

ちなみに、毎日制服姿のさくら以外三人は私服で登校している

「落ち着いてるって。 さくらもういいっす。相変わらずレン
にべったりだな」

「あんたもあんたでレン君にべったりじゃない森羅。何？ レン君
にあっちの気があるんじゃないでしょうね？」

「くはは、んな身の毛もよだつ事誰が考えるか。ただの挨拶だよ挨拶。つーかお前からこいつを取るわけないだろ」

ロックした腕を離しながら森羅は茶化すように笑い言う

言われたさくらの方は若干苦笑しながらも嬉しがり、レインをちらっと見上げた

「レン君もさくらちゃんと付き合いだしてからっしっかりと登校してきて、お姉さん嬉しいわ」

咲夜はのんびりとした口調で言いながらレインの頭をよしよしと優しく撫でる。レインは抵抗しない。っていうか咲夜に抵抗なんて無理だから

「あはは……………っ、レン君、早く行こつ。森羅も咲ちゃんも早く早く！」

「あつと……………引っ張るなさくら」

さくらは笑っていたが、何かを感じ一瞬だけ嫌そうな顔をする、すぐに戻し、レインを引っ張って学園へ走っていった

咲夜にだけ気が付く事があったが、あえて触れずに森羅と共に先へ行く二人を追いかけていく

その理由とは

「ねえ、あれ、有名な飛波君と久遠寺さん達でしょ。何で何の取り柄もない東條さんといえるのかしら？」

「しつ、聞こえるわよ。……知らないの？ 東條さん、あの人達と仲良いのよ」

「そうなの！？ しかも飛波君とあんなに仲良さそうに……どういう関係なの？」

「もしかして付き合ってるのか？」

「ええっ！ やだぁ……」

そんな言葉が耳に入ってしまったからだ

さくらと咲夜だけが、それでも聞こえてしまったのだから彼を遠ざけた

きっとレインに聞こえていたなら、迷わず怒っていただろうから

昼放課（昼休みの事）

朝と同じメンバーに加えて、今日は風紀委員長を勤めている黒髪黒瞳の友人、二宮 紅也が近くの机を合わせて昼食を取ろうとしていた

「つーか、紅也。お前風紀取り締まるのはいいけどさ……反抗する奴に対して跳び膝蹴りはないんじゃないかね？」

森羅は朝、校門で見てしまった出来事を思い出しながら身震いする

さくらに引つ張られたレインを追いかけた森羅と咲夜は、ちょうど校則を守らずにピアスを付けてきて力で押し通ろうする一年を紅也が跳び膝蹴りで鎮めた場面にちょうど出くわしてしまったのだ。ちなみに特選クラスのメンバーは簡単な校則さえ守れば私服であれ、ピアスであれ、何だってOKである

閑話休題

「仕方ないだろ。風紀を乱す奴は誰であろうと許すわけにはいかないんだ」

「跳び膝蹴りかました時点で充分乱してるけどな」

「問題ない。眼には眼を、歯には歯を　そして一撃には一撃を、だ。それに正当防衛も入ってるから教諭達も納得したさ」

やれやれと言った風に紅也はパックにストローを差して口に加える

「まあいいんだけどさ……それよりそろそろ昼飯くれよレン」

森羅はどうでもいい風に返すと、レインに昼飯を要求した

「ああ……ほら」

そう言っただけで黒衣の中から取り出すようにピアスから四つの弁当箱を取り出すと机に並べた

基本、レイン、さくら、森羅、咲夜の昼食はレインがさくらが作るか、食堂で食べるかの二通り。今日はレインが作った前者の日だと、その時だった

ピンポンパンポン

生徒会役員、東條 さくらさん。風紀委員長、二宮 紅也さん
至急、生徒会室までおいでください
繰り返します……

放送部からさくらと紅也の呼び出しがかけられた

「あれ、呼び出し？ 何かあったかな……ごめんレン君。お弁当は
持っていくね」

「ああ」

「んじゃ、また後でな」

そう言ってさくらと紅也は自分の昼食を持って教室を出ていった
残ったレイン、森羅、咲夜の三人

「……毎日毎日悪いな、四つも同じ中身の弁当を作らせて。だけど
これじゃあ誰が誰のか分からな……」

森羅はまったく悪いと思ってない顔でハンカチを広げ、弁当箱を開
ける。同様にレインと咲夜も開く

中身は……

レイン& a m p ;咲夜

海苔弁、きゅうりの浅漬け、ミニハンバーグ、卵焼き e t c .

森羅

一面に海苔弁

「分かりやすっ!？」

「あらゝ彩りが綺麗ねゝ」

「何で俺だけ海苔弁！？ ささやかな悪意を感じるんだけど！」

さすがにこれには驚き、抗議する森羅

だがレインはまったく取り合わず、食べ始める
だが

また囁きがあった

今度は、レインの耳にもはつきりと

「今のってレン君の手料理だね……？」

「しかも久遠寺さん達やさくらさんにも渡してた……」

「久遠寺さん達なら親友って知ってるけど、何でさくらさんにも渡すの？」

「もしかして本当に付き合ってるのかしら……？」

「やった、ありえない事言わないでよゝ」

きつと聞こえない程度に抑えたつもりだったのだろう
しかし聞こえてしまった

そう小声で話していた女子に森羅が低い声で叱る

「おい」

「な、何かな森羅君？」

「俺やてめえらは人間なんだから噂話とかするかもしれないけどよ、するならするで場所考えて喋ろや。飯が不味くなんだよ」

低い声で怒られた女子達はそっぽを向きながら謝ると、嫌な顔をして教室から出ていった

それを見届けた森羅はため息を吐きながら弁当に手をつけ、咲夜もいつも通りの笑みで「それじゃあ、いただきます」と食事を開始した

レインだけは睨みもせず黙々と箸と口を動かしている
少し悲壮が混じった瞳をしながら

放課後

何の部活にも入っていないレイン達は最後の授業が終わるとすぐに学校を出ていく
校門を出ると……

「お待ちしました森羅様、咲夜様」

待たれてた

そう声をかけたのは、燕尾服を着た齡にして六十過ぎの男性。後ろには黒い車が停められている

「おろ、長谷部？」

「あらゝ、どうしたのかしらゝ？」

森羅達を待っていたのは、長谷部と呼ばれた男性。久遠寺家の執事を勤めている優しいお爺ちゃんだ。しかしその立ち振舞いには一切、歳を感じさせない優雅さを兼ね備えており、奈波のお爺ちゃんランキングでは常に一位を獲得していた

ちなみに源内は三位。二位は源内の弟で学園長をしている光衛

閑話休題

「どうした長谷部？ 今日なんか用事あったっけ？」

「いえ、実は末由様がお昼頃にお帰りになり、久し振りに真理様の四人で食事などと申されましたので、買い物ついでにこちらに寄ったでございます」

「あらゝ、お母さん帰って来たのねゝ 嬉しいわゝ」

普段仕事でいない両親の内、一人でも帰って来たことに喜ぶ咲夜
食事也大賛成の事だろう

森羅も「帰って来たのかよ……」と愚痴を溢しながらも笑みが浮かんでいた

そんな森羅達に水を差しては悪いと思ったレインは声をかける

「森羅、咲夜。俺達の事はいいから早く帰ってやれよ」

「そうだよ。末由さんきつと喜ぶよ」

二人の好意に森羅達はお礼を言いながら車に乗って帰っていった
残ったレインとさくらは普段通りにてくてく歩きだす

基本、さくらの歩きにレインが合わせている

「あのさ、レン君……」

しばらく歩いてからさくらが声をかけた
何だ、と返すレイン

「今から……暇、かな？」

「ああ、大丈夫だ」

「な、ならこれからウチに来ない？ そろそろレン君の事紹介したいし」

「……………」

黙ってしまったレインにさくらが見上げ、

「駄目、かな……？」

「……………。いや、構わない」

間が空いたがそれでもレインは頷いた
肯定されるとさくらは花が咲いたようにパアッと喜びを表情で表す

「……だが俺はお前の家を知らないぞ」

「大丈夫、私が案内するし きっとお母さんも納得してくれるよ」

「……………。さくら」

「何？」

「メダパニってるだろ」

「うん」

「……………」

やれやれ

そう呟きながらレインはさくらの手を握った

さくらの家はどこにでもありそうな一軒家だったが、外から見える庭には様々な花が咲き乱れ、道路に面した塀の上や穴にも、植木鉢で飾られている。まるで花に包まれているようだった

「へえ……綺麗な家だな」

レインは見たまま何も考えずに感想を口にする
自分の家を褒められてさくらは顔を綻ばせながら玄関を開けた

「ただいま」

少し大きめの声で帰宅を知らせる

「さくら、おかえり」

戻ってきたのは、落ち着いた感じの女性の声だった
やがて、声の主が部屋から出てきて玄関へ

目測の齡はだいたい二十代真ん中から後半。栗色の髪を蝶々のような形に結わったりボンでまとめた、女性だった。調理中だったのかエプロンを着けている

顔立ちからさくらの姉かと判断するレインは軽く頭を下げる

「おかえりなさいさくら。 あら、お友達？」

「……飛波 レンです」

「レン君。私の彼氏だよ」

「あら、そうなの？ 初めまして。さくらの母のつばみです、
よろしく願いしますね飛波さん」

「こちらこそ……って、母親？」

思わず呟いてしまった

姉とばかり思っていたからこの不意打ちはなかなか効果がある

「はい、さくらの母親です」

「………………。何で知り合いの母親のほとんどが永遠の姉ポジションなんだよ」

思えば、森羅と咲夜の母親、久遠寺 未由も姉と間違っほど若くて綺麗に見える

正直レインはこの街に何か秘密があるんじゃないか、と本気で考えるようになった

「だ、大丈夫レン君？」

さくらが慌てて駆け寄る

我に返ったレインは「大丈夫だ」と返しておく

「さくら、実はお母さんが帰ってきててね。あなたとお話したいそうなの」

「げっ……！ 何でお婆ちゃん帰ってきてるの！？ せっかくいないからレン君を紹介しようと思ってたのに……」

「帰ってたら、いけませんでしたかさくら？」

悪態を吐くさくらに部屋の奥から声がかけれさくらは身を固くする通路にいた声の主は、八十過ぎのような感じだが、長谷部と同じく歳を感じさせない厳しそうな老婦人だった

レインも老婦人を見た瞬間、寒気を感じ、思わず身構えてしまう

「お、お婆ちゃん……」

「さくら、お茶を点^たててきなさい。つぼみは手伝いを あなたはこちらへ」

「……………はい」

有無を言わせない口調でテキパキと指示を与えていく。さくらは嫌そうに返し、つぼみは先程から変わらない笑顔のまま。レインは危機感を感じながらも言う通りに老婦人の後を付いていった

きい、きい

けっこう新しい家であるはずなのに、体重をかけるたびに木床は悲鳴を響かせる。まるで自分を責めているようだ。レインは思っつまう

お前は招かれざる客だと

きい、きい……

一步を踏み出すたびに神経が磨り減っていく。まるでこの家、この場所におけるルールを破っているようで落ち着くことができない。レインは慎重に、丁寧に、足音を殺そうと努める

きい

だが、成功しない

前を歩き自分を先導する和服の老婦人は一切の音を立てず、廊下を進んで行く

この場所の在り方を示すように、ただ無音に

しばらくすると、老婦人の背中越しに水墨画が描かれた襖が見え、すぐに開かれた。中は畳みと机が夕日を浴び、緋色に染められている。老婦人は無言で歩を進め、机を挟んで奥に座った

「お座りなさい」

静かに、厳かな雰囲気ですを発する

レインは部屋に入る前に黒衣を脱ぎ、老婦人の対面に正座で座った

「お初にお目にかかります。さくらの祖母のはつねと申します
レイン・アスハさん」

「っ !？」

レインは眼を見開き、驚愕する

今呼ばれた名前は、二つあるもう一つの名前

飛波 レンがあるからレイン・アスハが存在する

レイン・アスハがあるから飛波 レンは存在する

だが、その名前は 森羅と咲夜以外のこの街に住む人々にはま
ったく教えた事もないのだ

何故……？

「やはり当たりでしたか。さくらから聴いていませんか？
私ども東條の家系の女は代々巫女の血を継いでいるのです」

「巫女の……血？」

「ええ。最近では薄くなり、ただ飾りだけの神主になりはじめていま
すが、時々私のように色濃く生まれる者がいるのです」

「……先祖返りでもして超能力が使える、など言っんじゃないだろ
うな」

「ご明察。正確には、その人を『見る』事で人生が読めるんです」

「なっ!？」

「もつとも、初代の巫女が持つ十二ある一つだけですが」

無茶苦茶だ

そう呟かずにはいられないレイン

もしそうならさくらやつばみも何らかの能力ちからを持っている事になる。
きっと無意識の内だろうが

「……………。で？ その人の過去を『視る』事が出来るあんたが、
俺に何のようだ」

「焦らしてもいけませんので、単刀直入に言わせてもらいます。
さくらと別れなさい」

「……………」

何となく分かった
さくらを遠ざけ、一対一サシで話し合おうとした時から直感していた
付き合いだした頃ならその言葉に頷いていたかもしれない。しかし
今はもう さくらを抛り所として見つけてしまった今は、すぐ
に頷けはしない

「そういう話の役割は、昔から父親が言うのが定石だろう。それに、
いきなり『別れる』とか言われて『はいそうですか』なんて言える
か」

「虚勢ですね。別にいつもでしたらそれは婿殿にお任せし、私はさ
くらの応援をするつもりでした。しかし あなただけは認めら
れません。あなたみたいな……………」

人殺しなんかとは

「っ！ー！！」

「十五人いた家族の内、十二人を一人に殺されその一人を殺したあ

なたとさくらが釣り合うはずありません」

完全に『視られている』

視透みとおされている

はつねの言った通り、レインは過去に人を殺していた

家族を殺した家族

兄弟姉妹を殺した兄弟

そいつをレインは 殺した

紛れもない事実を突き付けられる

「……おいババア。人の古傷切開してんじゃねえよ。喧嘩売
ってんのか？」

「あなただって気付いているはずです。自分の存在は さくら
の妨げになっている事を」

「くっ……」

「あの子はいずれ、高みへと昇る事さえ可能な未来未来がある子です。
ですがあなたが 未来未来のない停滞したままのあなたがいればそ
れは夢幻と消えるのです……」

「っ……！」

言い返せない

眼の前にいる老婦人に何も言い返す事ができない

言い訳も、言い逃れも 何もかも

全てが事実だからだ

意識的にしろ、無意識的にしろ レインは心の片隅で思ってし
まっていたのだ

俺がさくらの道を妨げているのではないか

俺がさくらの友人関係を崩しているのではないか

俺は

俺が……

全ての元凶なのではないか？

「

」

「あなたは本当に分かっているのですか？ あなたはどれほどの人間と付き合っているのか、を。そして」

あなたがどれだけ堕ちた人間ということを

まさに心底と呼ぶほどその幾多の言葉は、レインの胸を、心を強く

決った

お話は終わりです、という言葉と共にレインはさくらが来る前に部屋から出て、家から逃げ出していた

そして、気付いた頃には辺りは真っ暗に染め上げられ、街灯が一つあるベンチに座っていた

これほどまでに心を碎かれたのは、久し振りである。一度目は家族崩壊

二度目は今

正直、耐えきれない

ただ何も考えず、座っていると、

「あれ？ レン君？」

声をかけられた

静かにそちらに眼を向けるとそこには、さくらが立っていた。手に様々な物が入ったスーパールの袋を持っている事から、買い物の帰宅中と推測できる

さくらは何も応えないレインに首を傾げながら隣にちょこんと座る

「どうしたのレン君？ お婆ちゃんからいきなり帰ったって聞いて心配してたんだよ」

「ああ……」

「もしかして……何か言われたの？」

気になるさくら

もしそうであるなら謝るべきだ

だが

紡がれた言葉は別物だった

「さくら」

「はい、何？」

「別れよう」

まったく表情を変えずにそう告げられた

「やっぱり別れた方がいい、俺達」

一瞬意味が分からなかったが、状況を把握すると苦笑した

「……冗談でもそんな事は言わないでほしいって言……」

「お前には道がある。だけど俺と一緒にだとなくなるかもしれないんだ」

さくらの言葉を遮り、レインはきっぱりと言い放つ
冗談でないと分かると、顔を俯かせる

「なあ、だから……」

「いや……」

「っ……」

「嫌だ」

「さく……」

「嫌だっ！！」

叫ぶように拒絶するさくらは立ち上がった

「私がいなかったらレン君が困るんだよ！ 私がいなかったら誰が毎朝学園に連れてくの！？ 誰がレンを引っ張るの！？ それに……それに……」

「大丈夫だ。元々一人でやっていた。お前無しでも俺はやっていく」

「でも……でも……！」

何とか言葉を紡ごうとする
だが、言葉が出てこない
探しても探しても、言葉は紡げない

「お前がいたら俺はお前に頼りきりになってしまっ。 それじゃ駄目なんだ」

「……私はレン君が好きなの。一緒にいたいんだよ！」

「さくら」

「……っ」

「俺の想いは恋じゃなかったんだよ」

「っ!？」

無情にも呟かれる言葉にさくらは息を呑み、絶句した

酷い言葉と分かっていて

けど言っしかないのだ

「俺は勝手な人間なんだよ。勝手に人才殺して、勝手に逃げて……。さくら、高みへ行ってくれ。それでいつか俺は凄い奴と付き合っていたんだって思わせてくれ」

なあ、さくら

酷い言葉を散々並べて一方的に断ち切る

深夜の静寂を二人の沈黙が包み込む

そして、

「
分かった」

その言葉にレインは顔を上げた

立ち上がったさくらは明後日あさっての方を向いている

その瞳に光が灯っていない事に、夜中でも分かった

「約束するよ。こんな　　こんな女と付き合ってくれて」

ありがとう

最後に囁くように言われた言葉はレインの心に深々と突き刺さる

元気だね、と言いなながら買い物を持って立ち去るさくらにレインは何も言えなかった

無心のレインはしばらくの間、ずっとベンチに座っていた
そこに声がかけられる

「 レイン」

辺りには誰一人歩いていない
だがレインは驚きもせず言葉返す

「……何だよフリーダム。後、その名を呼ぶな」

「生憎とそれはスルーするよ。 君を基点として半径1km以
内には誰も歩いていないよ」

「っ……くっ ！」

声の主は、耳に付けられた金色のピアスから
その言葉にレインの気持ち^{こころ}は瓦解し、嗚咽を漏らした
嗚咽を漏らして初めて分かった

ああ、俺はさくらが本当に好きだったんだ……

だからこそ余計に嗚咽が漏れる。なのに涙は一滴たりとも流れてこ
ない

それを聞いていたのは、ピアスのフリーダムだけだった

「 ふーん。お前ら、結婚まで行くのかと思ってたぜ」

翌日

休日を利用してレインは森羅の部屋に来ていた
何となく、ぼつりぼつりと結果だけを話したらこう言われたのだ
咲夜は母・未由と出かけて家にいない

「そんな簡単なものじゃないだろう」

「いや、選べつつつたらあいつはきつとどんな幸福な幸せよりささ
やかな幸せとしてお前を選ぶと思ってたし」

「……どうかな」

そう言つてレインは黒衣を羽織つて立ち上がる
足元には大きめの鞆が置かれていた

「ほんとに行くのか？」

「ああ……悪いな、いきなりで」

レインは数時間の間にあることを決断していた
それは奈波を出ること

何故そう思ったのかは覚えていない。だけど帰宅してから学園長に
退学を連絡し、祖父^{げんない}にお礼と謝罪を述べ、森羅にだけ自分の過去を
話した

「別に構わねえけどさ……自分に起きた事からは逃げるなよな」

「……………」

答えずにレインは立ち去ろうとする
そんなレインの背中に森羅はもう一度声をかけた

今言える眼の前の親友に必要なだろう言葉を

「時間が一番残酷で……優しい。お前なら分かるよな？」

レインから大切家族を、恋人を奪い、流れていくのは時間だったけど、レインの選択で傷付き、辛い思いをしたさくらやレイン自身の心をこれから優しく癒していくのも、やはり時間なのだ

真剣に悩み続けているレインに関わってきた森羅だからこそ言える、彼なりのエール

レインはちらりとだけ森羅を見ると、何も言わずに部屋から出ていった

森羅は何も言わない

ただ今の言葉を理解してくれたと信じて

夜空に星が瞬くように、溶けた心は離れない

例えこの手が離れても、二人がそれを忘れぬかぎり

恋は人を育むためにあるものなのだ

例え、思いが実らなかったとしてもそれは生きる糧になっていくんじゃないか

幸せとはだれかに与えられるものではない
自らの手でつかんでこそ価値があるんだ

あなたのこと好きだから、手放したくないけど……
あなたのこと好きだから、今は、手放さないといけない

「　　なあゝんて、世の中そんなに甘々じゃないわよ」

片手で持っている小説を閉じながら、さくらはため息と共に感想を吐き出す
ガタゴトと揺れる椅子は、まるで今の自分の発言を笑っているみたいだった

あれから三年が過ぎた

彼がいなくなった事に気付いたのは、学園に来てからだった

自主退学した。たったそれだけの言葉で知らされ、次には別の報せに入っていた教諭に腹が立った

放課後、彼の家に寄ったのだが、中には源内が一人で作業を続けているだけ。聞いてみたら、レンは帰ったと言った。どこに、と訊ねてもさあのと返されるだけ

自分の気持ちがよく分からなかった

怒っているのか？

悲しんでいるのか？

それとも　　何も感じないのか？

本当に……分からなかった

それから夏休みが明け、二学期が始まるうとした頃、祖母はつねの指示により学園を退学した。これはレインもそうなのだが、特選クラス生徒はすでに卒業して居座っている連中ばかり
いつ退学しようが関係ないのだ

ただで便宜的に退学としておく
閑話休題

退学したさくらは、はつねから巫女としての修行を強いられた。思いに関係なく、淡々と

反抗はしなかった

無論、反論も何も

きつとこれが彼の言っていたものだから

修行は一年半……レインがいなくなってから二年後に終わり、三年目までは普通の日常に戻ってきた

……いや、

普通の日常、何て戻ってくるはずがない

さくらにとって普通の日常とは レインが隣にいる事だった

そして、今現在

さくらの仕事が始まった

内容は同業者との連絡役

この時代になっても連絡手段に電話を使わず直接情報を伝えるに行く、という何とも首を傾げてしまう仕事

（ていうか、そろそろ情報社会に馴染みなさいよね……。変なところで古風なんだから）

ため息を吐きながらそう思うさくら

三年が経ち、多少なりともさくらは成長した

身長は相変わらず低いが、それでも三年前と比べて、十cm以上も伸びた。これが一番嬉しい出来事

二番目に嬉しい出来事は、大人っぽくなった事。胸も膨らんできたし、ウエストもくびれてきた。ボンキュボンとまではいかないが、それでも美少女の域には到達しているはずだと自分ではそう思っている

いる

事実そうだし

そして髪形は、ポニーテールを下ろしていた。リボンは首の辺りで縛っている

服装は、紅白の和服。巫女服(?) などと呼ばれそうなアニメとかに出てきそうな服装だった

閑話休題

(にしても…… やつと終わりかあ。次はえーつと……)

肩掛けバッグからファイリングされた紙を取り出すとぱらぱら捲つて、次の目的地を調べる
紙にはこう書かれていた

はくなみ
白浪

ここにいる同業者に連絡事項を伝えれば仕事はおしまい

(綾阪市とか面倒臭い場所を回ったけど…… ま、最後の一件なんだし、頑張っていこつ)

自分を応援するように笑顔を作る

だが、それを間違えて受けてしまった者がいた

「ねえねえ、かゝのじょ。かつわいいね」

十代後半から二十代前半と思われる、見るからに軽薄そうな男

目測で高三くらいか？

三人組の一人が、こちらが笑い出してしまいそうな軽薄な口調で、ボックス席に座っているさくらに声をかけてきた

三年も経ち、美しさも倍増したさくらは一年前から時々、こうナンパされている

ただどさくらは気付かないフリをして「そう？　ありがとね」とにこやかに答えた

最初に声をかけたカッターシャツの男は、下心見え見えの顔で「いや、ほんと、すごく可愛いって」と、同じような表情の残り二人と一緒に近付いてくる

そんな言葉に、営業スマイルで変わらず「ありがと」と答えるさくら

「いやいや。事実を事実として言っただけだって。マジで」

「そんなに言われると照れるわよ」

まったく照れてはいないと思うが、そのリアクションは逆効果だったかな？　と思う
そのせいだろう

「ねえねえ彼女、いま暇？」

と、喋った中に派手派手の柄のシャツを着た男の鼻の下が、思いつ切り伸びていた

「悪いわね、こっちは仕事中なの」

「あゝ、お仕事中、ね？　だったらさ、俺らもそのお仕事に付き合わせてくんないかな。代わりにさ、お仕事終わったら、俺達が色々ご馳走してやるからさあ」

さくらの横の席に置いている鞆と服装を見てそう言ったカッターシャツ男の態度が、一回り大きくなった気がした。しかも、耳にたくさんピアスを付けた第三の男も「食い物以外にも、色んなものをさあ」と調子づいてくる

ピアスを見terると『彼』を思い出す
よく似たようなピアスを付けている男は時々いたが、『彼』ほど似
合う奴はいなかった

「ありがたいけど、そういうわけにはいかないのよ。気持ちだけ受
け取っておくわ」

「なあなあ、いいじゃんよぉ」

「良い思いさせっから」

「俺たちと楽しくしようぜ？」

うわぁ、すっごい小物の台詞よね

本当に哀れと思いながらさくらは心の中で呟いき、ため息を吐いて
おく

未だに男達はさくらに小物臭い台詞を言ってくるがこの際、スルーだ
と、そう思い、ちらつと男達の奥を視界に捉えると、さらに同情し
てしまった

「ねえ」

「お、なにに？ 何でも聞いてよ」

「ご愁傷さま」

いきなりそんな事を言われて、眼を丸くする三人
一人が何かを言おうとした瞬間、
スパパパーン

そんな軽快な音と共に三人の頭が上下に揺さぶられた

「ぎゃあっ!?!」

「なぶい!?!」

「ぎゃっ!」

三人は短い叫び声を上げると頭を押さえながら床に蹲る

「少しは大人しくしてくれて心配いらないと思ったらこのザマか。やはりうわべだけの反省だったんだな」

三人の後ろからため息と共に呟かれる

カチューシャで長い前髪を左右に流したヘアスタイル。そして

鋭く金と碧に輝く眼光オッドアイの女性だった

この女性が暴走する三人を手を持っている竹刀で殴ったようだ。しかも三人を知っているような口ぶり

「てめっ……いきなり何しやがんだ!」

カッターシャツの男が頭を押さえ、怒気を孕んだ声を上げながら振り向いて 固まった

「ん? 私の顔に何かついてるのか?」

「せ、せせせ生徒会長ッ!?!」

その単語が残りの二人に届くと、その二人も痛みも忘れたように振り向いた

「元、だ。だが……見てしまった以上見過ごすわけにはいかないな。お前達を改心できなかったのは私の責任だ」

「め、滅相ありませんっ！」

「全部俺らが悪いっス！」

「近堂生徒会長が責任を感じる事はありませんよ！ いや、マジで！」

……………

何なんだろう。妙に彼女に弱いというか……上下関係が出来ている？自分の時とまるで逆と思いつながら見ていると、彼女と視線があつた彼らに対する事を聞こうとしているのだろう

さくらは一先ず、気にしないでジェスチャーで伝えた

「あ、ああああの、生徒会長？」

「だから元、だ。普通に先輩かさん付けで構わない」

「え、えっと……近堂先輩……。ど、どうしてここに、いや、おられるのでしょうか……？」

「出稽古の帰りだ。奈波と言う街の道場まで行ってきた。あそこの道場主 塚原 劉允りゅういんさんは素晴らしい。今度紹介しようか？」

「い、いえ！ お断りします……！」

とことん彼女を怖がっている三人組は、「それではこれで！」と、叫ぶと逃げるように別車両に消えていった

彼女はまだ何か言いたげだったが「まあいいか」と興味をなくすとさくらに向き直った

「恥ずかしい思いをさせてしまったな。彼らに代わり謝らせてくれ」

「あはは、構わないわよ。……ところで、あなた……」

「ああ、自己紹介がまだだったな。近堂 麻奈だ」

「麻奈ちゃんね。私は東條 さくらよ、よろしくね」

互いに自己紹介が済んだところで、さくらが「立ち話もなんだし、座ったら?」と、席を勧めた。麻奈は「それでは」と、さくらの対面に腰掛け、荷物を脇に置く

「麻奈ちゃんって劉允のおっちゃんと知り合いなの?」

「うん、正確には高校の顧問が知り合いで、私は顧問を通して仲良くさせてもらっている……その口ぶりだとさくらさんも劉允せんせい師匠の知り合いなのか?」

「私は精々、顔見たら挨拶する程度よ。おっちゃんとは私の友達が師弟関係なの」

その友達というのが、レイン、森羅、咲夜なのだ
三人は劉允から剣術を学び、我流で使えるようになっていった。それもなかなか強い

「そうか。師弟とは羨ましい」

「そうかな？ …… 麻奈ちゃんはどこから来たの」

あっさりと話題を変えるさくら

麻奈も嫌そうな顔一つせずに答える

「白浪って小さな街だ。だが私にとっては大事な場所だよ」

「あっ、奇遇ね。私もこれから白浪で仕事なの」

「ほう……その巫女服も仕事で使うのか？」

「うーんどうだろう…… 麻奈ちゃんなら知ってるかな、みなかた南方っていう神主」

「南方？ ……その家族なら引越したと思うよ。一年くらい前に」

「はい！？」

今から行かなくては行かない神主と家族が引越した事に驚きだす
さくら

引越したという事は、当然そこには誰もいない。さくらの仕事は
終わったも同然だ

「私も詳しく知らないが……何でも神主の息子さんが別地方で起こ
した事業が成功して、神主やるよりそっちを家族全員で手伝った方
が暮らしに不自由がない、のが理由だったと思う」

「な、何よそれえ……。はあ……最悪」

ため息を悪態と共に吐き出す

やっぱり電話くらい使えよとツッコミたい

「はは……まあそつため息を吐かない方がいいよ。幸せが逃げてしまつ」

「……安心して。幸せはもう　　ないから」

「……………?」

「ま、確かにそうね。……っていうか、今晚どうしよう」

「夜に何かあるのか?」

「宿よ。ほんとだったら南方の人のとこで一泊して帰るつもりだったの…………」

「……………。お金はないのか?　一応小さいが民宿もあるんだけど」

「生憎、電車代と少ししかないのよ。参ったわね…………」

そう言いながら頼杖を付き、窓の先を眺めるさくら

それを見て麻奈は「ふむ」と考える仕草を取ったと思うと、パチンと指を鳴らした

「なら私の家に来ないか?」

「えっ?　いいの?」

「ああ、私はぜんぜん構わない。母さんも父さんも快く快諾してく

れるだろうし……あいつも、いいだろう」

「あいつ?」

話し掛けるようではなく呟かれた言葉にさくらが首を傾げながら訊ねるが、麻奈は頭を振って「いや何でもない」と付け足した

「……そう、ならお言葉に甘えて厄介ななるわ。ありがとね麻奈ちゃん」

「いや、こちらこそ一晩だがよろしく頼む」

互いに会釈程度に頭を下げて微笑むと、同時に、

【次は白浪^{はくなみ}】

白浪……】

ひび割れたアナウンスが二人の耳に届いた

駅ホームに降り立つと、微かに潮の香りが風に乗って流れてきた今時珍しい、人が切符を確認する改札口を通ると、遠くに海も見えた駅を出てすぐ目の前にあるバス停留所。はくなみバスという表記が剥がれかけている。白浪^{はくなみ}のほとんどを廻る市営バスが通っているのだろう

道路の向こうにはさびれた小さなパチンコ屋とが見える

よく潰れないものね、とさくらは思った

駅前の道を真っ直ぐに進むと、すぐに長い下り坂になっていた

左右には民家に混じって小さな病院やタバコ屋、雑貨屋などが並び、
眼下には街の遠景が見下ろせた

その向こうには太陽の光で輝く海が広がっている

「海と山に囲まれてるなんて珍しいわね……」

「まあね。でもそこが白浪（うしな）のいいところだ」

下り坂の途中を左折し、歩くこと約十分

『近堂（こんどう）』という表札と『生花専門店』という看板が掛かった二階建ての木造家屋の前で、麻奈は足を止めた

「着いたぞ、ここが私の家だ」

「へえ……お花屋もやってるんだ」

「ほとんど母さんの趣味だけだね」

そう言うと開け放たれた玄関に入った

「ただいまー」

普通に声をかける。しばらくすると、エプロンを身に着けた女性が現れた

「お帰りなさい麻奈。出稽古はどうだった？」

「実に有意義な時間だったよ。いつか普通に行きたいな」

「じゃあまた休みの日にいつてらっしゃい。 あら？ ところで、後ろの方は？」

麻奈の後ろに立っていたさくらを見つけると、首を傾げながら麻奈に訊ねた

麻奈は「実は……」と簡単に経緯^{いきわづ}を話し、泊めてもいいかと頼み込む。母親は考える素振りさえ見せずに「もちろんいいわよ。何日でも泊まっていつてね」と、さくらを心から歓迎した
さくらは笑いながらぺこりと頭を下げるのだった

さくらには馴染みのある古い木と蘭草^{いぐさ}の香り。八畳の居間には心地よい風が流れていた

窓は全面開け放たれており、網戸の向こうの狭い庭に洗濯物が靡^{なび}いている様子が見える。庭の隅には麻奈の母親 近堂 雪枝の趣味である家庭菜園が小さな緑の葉を茂らせている

居間に置かれたテレビには野球が映っており、選手達が熱戦を繰り広げていた

雪枝が用意してくれた緑茶に口をつけながら、さくらと麻奈は黙ったままテレビと、その正面に座っている男性を眺めていた。短く切ったタバコを口にくわえ、食い入るように試合を見ているのは雪枝の夫 近堂 直志^{なおし}だ。薄紺色の甚平を身に着け、顎の無精髭をぼりぼりと搔いている

何故こんな状況になっているかと言えば、のんびりしながらさくらを居間へ案内した雪枝に、野球を見ていた直志が「今、いいところなんだ。少し黙ってる」という一喝を発したからだ

雪枝は「ごめんなさいね」と言いながら台所へ引っ込んでしまい、麻奈も済まなそうな表情を浮かべながら隣に座っていた

しばらくして「試合終了」というアナウンサーの音が響く。直志は負けた方を応援していたらしく「ちっ」と舌打ちし、短くなったタバコを灰皿でもみ消した

そこでようやくこちらを振り向き、驚いた表情を見せた

「おっ、麻奈じゃねえか。帰ってたのか？」

「帰ってたのか、じゃない。もう十分も前からここにいたんだぞ」

「いやー、そうだったのか。悪い悪い。試合がずいぶん白熱してたもんでな。そんで……隣にいるお嬢さんはどなただ？」

直志が台所から冷えたイチゴを持ってきた雪枝からイチゴを一つ取りながらさくらに視線を移す

麻奈は頷いてから雪枝にも話したように経緯を簡単に説明する。それが終わり、横にずれてちらりと眼をやると、さくらが頷いた

「初めまして、東條 さくらと言います。麻奈ちゃんのご厚意に甘えさせてもらってます」

礼儀正しく、正座で自己紹介をするさくら

「で、だ。母さんの許可は取ったから後は父さんだけなんだが……」

「別に構わねえよ、好きなだけ泊まってけ」

またまた考える素振りさえ見せずに答えてしまう直志
本当にこの家族は優しいな、とさくらは心から思った

「それじゃあ今晚の夕飯はたくさん作らなきゃね 何がいいかしら…… あつ、麻奈はあの子に連絡しておいてね」

「ああそうか。今日はあいつも来るんだったな」

『あの子』や『あいつ』と呼んでいる人は誰なのだろう？
聞いてみたい気がするが来るみたいだったのであえて聞くこともない
さくらはその言葉を胸に仕舞い込み、「手伝います」と言った

『もしもし』

「やあ、私だ」

『マナか。家から掛けているという事は帰ってきたのか。おかえり』

「ただいま。今日はウチに食べに来る日だろう？」

『……ああ。そうだったな。もう、今日なのか』

「……お前がそう抑揚なく言うと、情性に生きてるみたいだぞ、大

丈夫か？」

『事実だから、な。起きて、仕事に出掛けて、食べて、寝て身体が覚えている事を繰り返すだけ。だが慣れている』

「……………。今日はな、私の友人も共に食べるが構わないか？」

『別に。俺としては近堂家の家計が心配なんだが』

「お前は本当に主夫みたいだな。ウチはそこまで貧乏じゃないしお前が恩返しとか言って渡してくるお金のおかげで財政は潤っているよ」

『……………そうか』

「うん、そうだ。じゃあ私は夕飯の支度を手伝うから、もう切るよ」

『ああ。また後で』

「また後で」

さくらと麻奈が手伝ってくれたおかげで二時間後には、長方形の机にいっぱい料理が並べられていた

四人でこんなに食べられるのかな、と思うさくら。麻奈がその表情で思考を読んだのだろう

「大丈夫。今日は知り合いが来る日なんだ。これぐらいでちょうどいい」

と、言った

その時、玄関から声が響いた

「こんにちわ」

「こんばんわ、ですよフリイ」

「邪魔をするぞ」

誰かが入ってきた

きつと知り合いだ。複数とは聞いていなかったがまあ大丈夫かな、とさくらは安心しきって待っていた

「マナちゃん」

最初に飛び出して来たのは、十歳ぐらいの紅髪黒瞳の少女
天真爛漫という言葉がよく似合いそうだ

「お邪魔致します。一週間振りですねマナ様、直志様、雪枝様。本日もお招き頂きありがとうございます」

次に入ってきたのは、腰まで届く長い藍髪に冷めたような琥珀色の眼。青いコートを羽織った寡黙少女

寡黙というより無表情、無感情など『彼』とそっくりだった

「すまないな三人とも。いつも誘ってくれて。ほら、フリー、つまみ食いをするな」

最後に入ってきたのは、白い長髪にエメラルドグリーンの眼。黒の服に金の幾何学模様が入った服を着てその上から白い法衣^{ローブ}を纏っている男性

二人の保護者だろうか？

「ん？ ラグナ、レーちゃんはどうした？」

まだいるのか、麻奈がラグナと呼んだ青年に訊ねた

「いつも通りだよマナ……」

「こんにちは」

「ほら、来た」

また玄関から声が響き誰かが居間に入ってくる

その姿を見てさくらは眼を疑った

入ってきたのは、黒髪黒瞳の青年。耳には金色のピアスを付け、黒衣を身に纏っている

さくらは知っていた。彼を

青年もさくらに気付いた瞬間、有らん限りに眼を見開く

二人とも互いしか見てない

そして、

「レン君？」

「 さくら? 」

相手の名前を口にしたのだった

「なんで……どうして……! つ、マナー! 」

レン君 飛波 レン レイン・アスハは一步後ろに後ずさりしながら麻奈の名前を叫ぶ

「何でお前がさくらと知り合いなんだっ! 」

「ど、どうしたレーちゃん。もしかしてさくらさんと知り合いだったのか? 」

「いいから答えてくれっっ! 」

「か、帰りの電車でナンパされてたから助けたんだ。それで色々理由があつてうちに……」

「っ……くっそう……! 」

皮が破けるくらいに拳を握り締めるレイン
まるで全てに後悔しているように

さくらは静かに立ち上がりレインに近付いていく

「レン……君」

「さく、ら……」

さくらが一步近付くごとにレインは一步離れる
怖がるような表情を浮かべて

「レン……」

「来るなっつっ！……！」

「っ！」

初めて聞くレインの大絶叫にびくつと身体を震わせ立ち止まるさくら

「あ……」

小さな子供のようになり敗した事に気付いたレインは驚愕という顔で
辺りを見回した

呆気に取られている近堂夫妻と麻奈

成り行きを放って置くかのように食事に手を付け、怒られる紅髪黒

瞳の少女 フリイと怒る藍髪琥珀瞳の少女 ウィン

ただじっと見守る白髪翠瞳の青年 ラグナ

そして 怯えたような顔をしているさくら

「う……あっ……」

何を言えば良いのか

どう取り乱しを消せば良かったのか

もう、レインの思考は分からなかった
だから、

「っ……ごめんなさい……！」

逃げ出した

さくらから背を向け、踵を返し、玄関から飛び出す

「あ……ま、待ってレン君ッ！」

さくらも慌てて外に飛び出そうとするが、

「待つのはそなたださくら。闇雲に彼を探しても見つからぬよ」

そうラグナに止められた

さくらが振り向くと、ラグナは座りながらさくらを見上げている

「……どうして？　あとあんた誰？」

「そなたがあやつの居場所を知らぬから。ちゃんと説明が欲しい者達がいるから。この二つだよ。　　ちなみに私はラグナロク。ラグナとでも呼んでくれ」

自己紹介したラグナはそう言って顎で説明が欲しい者達を差した。差した方には、呆気にとられている麻奈と直志、雪枝がこちらを見ている。

「大丈夫。レインにはもう逃げ出す場所など残っていない。だから話そう。思いの丈を全部、な」

「あ……」

溜まっていた何かが溢れる
優しく言われたその言葉に

涙が頬を伝った

「……………そうか……………」

全てを語り終えた後、麻奈はゆっくりと息を吐いた

私の話は何を感じたんだろう

何を考えてくれているんだろう

何を……………言ってくれるんだろう……………

「……………ありがとう……………」

麻奈はさくらにお礼を言い、頭を下げた

それから麻奈も自分達の過去を話した

元は家族だった麻奈も含めた十五人の家族と共に生活し、とても幸せだった話を

突然、麻奈と^{じぶん}レイン以外の家族が全員、斬殺された、とても辛かった話を

麻奈の視点で話した

「……………レーちゃんは今、本当の意味で生きてないんだと思う。生きるっていうのは、一人じゃないんだ。支えてくれる人がいて、初めて人は立つことができる……………」

話し終え、虚空を見ながら麻奈は辛そうに、そう呟く

「そして立つことができるから、未来へ歩く事ができるんだよ」

「……………」

「……ラグナ。君は事件当日もレーちゃんのピアスにいたのだろうか？ あの日、起きた事を教えてはくれないか？」

沈黙するさくらをそのままにして麻奈はラグナに頼み込む

あれから十年以上が経った

だから……聴かせて欲しい、と

眼を瞑っていたラグナは静かに片眼を開き、ウインを見る。膝で眠るフリイを撫でながらもウインはこくり、と頷く

「……相分かった。あれは十五年も前だったな。レインがシ

スターに頼まれたおつかいを済まして帰る途中、レインが変な感じがすると言ったのだ。慌てて彼が教会に入ると あいつが立っていた」

「あいつ？ シスター達全員を殺した犯人がか？」

「ああ。シスター達を殺して、火を部屋に放っていた……シエルがな」

「……………え？」

突然言われた家族の名前に麻奈はぼつりと漏らす

「シエルがアスハ夫妻を、そして兄弟姉妹計十人を斬殺したんだ」

「ま、待て！ 遺体にはシエルのも含まれていたはずだ！ お前の

話が本当ならシエルは一体誰に殺されたんだ!？」

「レインだよ」

「レー、ちゃんが……?」

「ああ。レインは自分を殺そうとしたシエルに反撃して……彼を殺したんだ」

きつぱりと言い放つラグナに麻奈はさくらと同じように顔を俯かせる
直志は何か言おうと口を開いたが、結局何も言えず、ビールを一気に煽った
雪枝はきつと自分が水を差すべきではないと判断しているのか、ずつと直志の横で三人を見守っている

「そうか……だからレーちゃんは、自分の事を……」

「……ああ」

「……なら、私には説得などできない、か。何故ラグナ自身で説得しないんだ?」

「私やそなたが説いても、レインの心には届かぬからな」

「……何で?」

「家族だからだ」

静かに自分が説得しない理由を話すラグナ

「家族は大切だ。それは間違いじゃない。生きていく上ではとても大きな支えだろう。だが、結局私達は他人なんだ。本当の家族以上に家族であっても本当の家族以上に他人と見てしまうんだ。それでは生きる意味にまではならない。だから……さくら、そなたの力が必要なんだ」

ラグナは今まで向いていた方向からさくらに視線を移した
ずっと俯いたままだったが、その視線に気付いて顔を上げる

「わ、私は……どうしたらいいか分からないの……何て言えば……」

「支えるというのは難しいものだ。背中を押すというわけじゃない。手を引くわけでもない」

「難しいよ……分かんないよ……」

「レインは、きっと暗い世界の中にいるんだ。どこを見ても真っ暗な、自分の姿さえ確認することできない、深く悲しい世界に。」

だから、まず灯りを持っていつてあげるんだ。懐中電灯みたいに遠くから照らすのではない。そなたとレイン、そなたら二人の足元がわかるくらいの小さくて暖かな灯りを」

きつと今までで一番綺麗な例え

ラグナはさくらにそれを教えていく

さくらは無言で言葉を聞いていく

「そして歩けばいい。二人でしか作ることの出来ない、夢の未来へ」

「二人しか作ることの出来ない……夢の未来……」

ラグナの言葉を何度も言い返してゆく
何かを掴んだのだろうか

誰にも分からない
分かるのは、さくらのみ……

「
ラグナ」

ぼつりとラグナの名前を呼ぶ

「レン君は、どこにいるの？」

「………………。何を言つか考えたのか？」

「……………レン君と付き合ってた頃の私ってね、いつつも行き当たりばったりだったのよ。前以^もって計画してた事はみんな失敗。だから」

今回も行き当たりばったりよ

くすくすと笑いながら言った一言に思わずラグナは苦笑する

「そなたは三年も経つのに変わらないな」

そうしてレインの居場所を事細やかに説明していく

さくらも元は特選クラスのメンバーだ。それくらいなら、一度聞いて覚えた

じゃ、行ってくるわ

さくらは自分でも道順を復唱してから全員に断りを入れ、外に飛び出していった

残された近堂家とアスハの面々

「おい、ラグナ」

しばらくしてから直志が声をかける

「さくらさんに任せて、いいのか？」

「ああ……三年もの間、互いに互いを好きで居続けたんだ。きっとうまくいくさ」

「はあ、何かロマンチックね」

雪枝は呑気な事を言っていたが、誰もツッコまなかった

ただ惰性のように生きていた

起きて、仕事に出掛けて

食べて、寝て

身体が覚えている事を繰り返すだけ

そんな日々生きていた

身体を痛め付けるように紹介してもらった仕事を働き続けた

何もかも忘れたくて、全てを省みずに仕事を続けた

何も考えたくなかった

何もかも忘れていたかった

だから 忘れてしまった

だけど 忘れられなかった

もう何もかもが嫌だった

ざっ……

レインの耳に聞き慣れた土を踏む音が入ってきた

「……レン君、みつっけ」

声で分かる。さくらだ

何故と思考するがすぐにラグナが教えたんだらうと答えを出した

「こんな所にいたんだ。あ、隣いい？」

いい、よくない、と返事する前に隣に座り込むさくら

「……………」

「……………」

互いに無言

静寂が辺りを包み込む

そんな時間が何秒、何分経っただろう

静寂を破りさくらが話し出す

「どうして私から、奈波から逃げたの？」

「っ……………」

「逃げないでレン君。大丈夫、私は無理に聴かないから。押したりしないし、引っ張ったりもしないよ。隣で聴くだけだから、ただ言葉漏らすだけでいいよ」

微笑みながら、顔を腕と黒衣で覆っているレインに優しく凭れ掛かった

それ以上何も言わない

押したり引つ張ったりしない

そつと寄り添ってあげている

「……………分かったから……………」

無限にも等しい時間の後にレインは身体を動かさずに、口だけを動かした

「さくらの家で婆さんに言われて、分かったんだ……………思い知らされたんだ……………」

「……………何を？」

「俺は……………罪を犯した俺に関わった奴を、不幸にすることを……………俺が何かを壊してしまう元凶なんだって……………」

ぼつり、ぼつり

締め切らなかつた蛇口から漏れる水滴のようにレインは少しずつ、はつねに言われた言葉を喋っていく

さくらは相づちは打っていたが、最後まで口は挟まなかつた最後まで聞き終えると「そっか……………」と天を仰ぐ

「レン君はお婆ちゃんの言葉を真に受けたの？」

「全部、本当だから……………」

ようやくレインは顔を上げる
三年前と変わらない無表情の顔
さくらが大好きな人の顔だった

「俺……どうしてシエルに反撃したんだろう」

「生きたかったからでしょ」

「シスターや皆がないこの世界に……生きる理由なんてないよ……」

「え……？」

「俺も……シエルに殺されて……シスター達と死にたかった」

「だめっつー！！！」

思わず叫ぶさくら

叫び、無理にレインの頭を胸に抱き締めていた

「あ……」

「お願い、お願いだから……お願いだから、そんな悲しいこと言わないでよ。私、レン君が好きだから。レン君がいなくなったら、私がレン君みたいになっちゃうから……」

聴いてるだけじゃなかったのか、何て聞けなかった

誰かに抱き締められるなんて久し振りだった

言葉は紡げなかったが、代わりに腕を伸ばした。伸ばして
さ
くらの背に回す

「俺も……俺も、さくらが好きだ。大好きだ。三年前、別れてから
もずっと好きだった……だけど……」

回した手がぎゅっと力を籠める

「怖いんだ。俺は知ってるから。どんなに大切な奴も、いなくなっ
てしまう事を……一番幸せな時も、いつかは消えてしまうから
俺、怖くてたまらないんだ……」

どんなに腕つぶしが強かろうと
どんなに頭が良かろうと
ずっと隣に居てくれない。居続けさせることなどできない

「私はここにいて、今はここにいて、今、レン君を見てる。これ
からもずっと、一番傍で見てる」

「でも……いつかきっと、会えなくなる」

「うん。ずっと一緒にはいられないね。いつかは会えなくなる時が、
絶対に来ちゃう。それがいつになるかなんて……私には分かんない。
もしかしたら、三年前みたいにあんな突然かもしれない」

でもね……

ますます強く抱き締めてくるレインを強く、優しく抱き締め返しな
がら、レインの髪を、指先でそっと撫でる

耳に付いているピアスが、言葉を待つように揺れる

「もしも私が、レン君より先にいなくなっちゃったりしても」

私はずっと、レン君の傍にいる

レン君の一番傍で、ずっとレン君を見てるから

私はずっと、レン君を守るから

レン君が立ち止まらないように

「私は……レン君の罪を許します」

「っ!？」

また腕にぎゅっと力を籠める

「レン君が明日も幸せになるために、うんと優しくしてあげます」

「さくら……」

レインは胸から顔を上げる

瞳には溜まることのなかった涙が溢れんばかりに溜まっていた

「俺、弱虫だから……さくらがいなくなったら、絶対泣くと思う。
泣き続けて傍にいてくれても、気付かないかもしれない。さくらの
事、嫌いになるかもしれない。それでも……こんな俺と、一緒にい
てくれるか？」

「うん」

「一緒にいて、幸せに出来なくてもか？」

「うん」

「俺と　結婚してくれるか？」

「うん」

「！……いいのか？」

驚きに眼を見張りながらレインはさくらに訊き返す

「うん。レン君といることが　私の幸せだから」

「~~~~っ……くっ……うっくっ……わあああああああ
っ……！」

堰が切れたのだろう

レインは泣いた

今まで泣けなかった分を取り戻すように

子供みたいに、わんわん泣いた

さくらは何も言わず、我が子をあやすようにただずっと、頭を撫で
ていたのだった

数分後

泣き止んだレインはさくらと共に歩いていた
互いに互いの指を離さないように絡めて
二人は近堂家に向かって歩いていった

「……………ごめん」

不意に立ち止まり、そう謝るレイン
さくらは、ん？ と首を傾げる

「三年前、黙って逃げて……………」

「もう、いいよ。レン君は私の幸せを考えて、
そういう行動を取っ
たんだし」

「……………うん」

「……………でも寂しかった」

「だろうな」

「だからね……………」

上目遣いでレインを見つめる
一瞬もレインは逸らしたりしない

「今は 寄り添うだけじゃ物足りないの」

さくらは眼を閉じて、爪先で立つ
レインも眼を閉じ、^{かが}屈み、そして
唇を重ねた

なめらかで、湿っていて、柔らかくて、温かった

これが、人の温かさ……

レインは唇をそつと離してみる

「レンく……」

息を継いださくらが、レインの名前を呼ばうとする
その前にもう一度、唇を今度はこっちから塞いだ

「んっ……」

強く……強くさくらを抱き締める
自分の抱り所である彼女を

さくらの声、さくらの髪、さくらの唇、さくらの温もり、さくらの
感触

さくらの全部をずっと憶えておくために

別れても……一緒であるために

今はさくらを憶えておきたかった

やっと彼の刻は動き出す

彼女と進むその一步が幸せに続いていると信じて

（後書き）

というわけで、レインとさくらの恋物語でした

如何でしたでしょうか？ 私個人としては、会心の出来だと思っ
んですが……

付き合い、別れ……そして再会

皆様から見たらどう思われるでしょうか

ぜひ感想、意見、批判を書いてくださると嬉しいです

最後に、この作品ですが 時間があり、また創作意欲があれば
第二弾を書きたいな～なんて思っちゃったりもしています

共に歩いていくと決めた二人のそれからが書いている本人でも気に
なっているんですよ（オイ）

それでは、今宵はこれにて御機嫌よう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7488u/>

さくらアナザー ～罪隠す弱者と寄り添う桜花～

2011年10月6日17時08分発行